

【資料】

広島文教女子大学学習支援室の利用状況調査

豊後 宏記・藤井 絃子・濱田さつき

The Evaluation on the Learning Support of Hiroshima Bunkyo Women's University

Hiroki Bungo, Hiroko Fujii and Satsuki Hamada

緒 言

学習支援室に期待される機能としては、リメディアル教育など基礎学力の支援を目的とした「学習支援」と、自律的な学習を促進することを目的とした「学修支援」という大きな二つの機能が挙げられる。本学では、「学習支援」については、2012年度から学習支援室に専任教員を配置し、学生の学習相談に応じ、また個別指導も行える体制が整えられた。「学修支援」の面では、2014年度にラーニングコモンズを開設し、さらに2014年12月には学習支援室に隣接する2室に個別学修専用施設 Independent Learning Suite（以下「ILS」という）を設置するなどの整備が進められてきた。こうした体制の整備によって、学習支援室が一定の成果をあげてきたことは、溝渕・先矢（2015）（※1）で報告されている。

しかしながら支援の質が向上する一方で、その活動は依然として学習支援室内という狭い範囲にとどまりがちであり、全学的規模で組織的な支援活動がなされているとは言えないのが現状である。2012年度以降の学習支援室利用の状況は、専任教員による相談記録によって確認できるが、全学的な支援システムを構築するには、すでに学習支援室を利用している学生だけでなく、学習支援室を利用していない学生の状況も把握する必要があるだろう。こうした点を踏まえ、学習支援室では ILS の新設を機に、2015年11月に学習支援室・ILS の利用に関して全学対象のアンケート調査を実施した。

方 法

(1) 対象者及び調査方法

平成27年11月1日時点で本学人間科学部の全学科に在籍する、休学者を除く1,233人を対象とし、学科及び学年ごとに11月中の特定の日時に無記名自記式質問紙調査を実施した。調査の実施にあたっては、調査の目的を口頭及び文書にて説明し、調査票の提出をもって調査への協力が得られたものと判断した。解析対象者は938人であり、有効回答率は76.1%であった。

(2) 調査内容

調査内容は、属性（学科、学年）、平成27年度前期期間における学習支援室の利用頻度、学習支援室を利用する場合の目的、学習支援室を利用しない場合の理由、学習支援室の相談窓口の利用の有無、学習支援室の相談窓口を利用しない場合の理由とした。表1に対象者の属性を示す。また、表2に設問内容と回答選択肢を示す。

表1 解析対象者の属性

	学 科					計 人
	初等教育 人 (%)	人間福祉 人 (%)	心理 人 (%)	人間栄養 人 (%)	グローバルコミュニケーション 人 (%)	
1	92 (37.9)	46 (18.9)	16 (6.6)	62 (25.5)	27 (11.1)	243
2	97 (37.2)	41 (15.7)	28 (10.7)	63 (24.1)	32 (12.3)	261
3	77 (30.3)	48 (18.9)	35 (13.8)	80 (31.5)	14 (5.5)	254
4	67 (37.2)	33 (18.3)	17 (9.4)	59 (32.8)	4 (2.2)	180
計	333 (35.5)	168 (17.9)	96 (10.2)	264 (28.1)	77 (8.2)	938

表2 設問内容及び回答選択肢

項 目	設 問 内 容	回 答 選 択 肢
学習支援室の 利用頻度	学習支援室 (ILSを含む) をどれ くらいの頻度で利用しましたか？ (単一回答)	1. 週に3回以上 2. 週に1回程度 3. 月に1回程度 4. 2～3カ月に1回程度 5. 前期中に1回程度 6. 利用していない 7. 覚えていない
学習支援室の 利用目的	学習支援室 (ILSを含む) をどの ような目的で利用しましたか？ (前期中に1回以上利用した者 が複数回答)	1. 課題 (卒論・レポート等) のため 2. 課題以外の自習のため 3. 学習相談のため 4. 特に目的はない 5. その他
学習支援室を 利用しない理由	学習支援室 (ILSを含む) を利 用しない (利用しにくい) 理由 を教えてください。 (複数回答)	1. 学習支援室 (ILSを含む) があることを知らな かったから 2. 学習支援室 (ILSを含む) の場所がわからない から (わかりづらいから) 3. 開設時間に行くことができないから 4. 入りにくい雰囲気だから 5. 何をするとところかわからないから 6. 他の場所 (図書館・文教ホール・ゼミ室など) を利用しているから 7. 特に利用する必要がないから 8. その他
相談窓口の 利用の有無	相談窓口を利用したことはあり ますか？ (単一回答)	1. はい 2. いいえ 3. 覚えていない
相談窓口を 利用しない理由	相談窓口を利用しない (利用し にくい) 理由を教えてください。 (複数回答)	1. 相談窓口 (スタッフ在室) があることを知らな かったから 2. 開設時間に行くことができないから 3. 相談しにくい雰囲気だから 4. 何を相談するところかわからないから 5. 特に利用する必要がないから 6. その他

(3) 統計解析

統計解析ソフトには IBM SPSS Version 21.0 を用い、単純集計を行った。

結果及び考察

(1) 学習支援室・ILS の利用頻度

図1に利用頻度を示す。全体では「週に3回以上」と回答した者の割合は8.4%、「週に1回程度」と回答した者の割合は10.0%であった。これらを合わせると18.4%であり、全体の約20%の学生が週1回以上の頻度で学習支援室・ILSを利用していた。学年別にみると、利用頻度は4年生で最も高く、「週に3回以上」と回答した者の割合は17.8%、「週に1回程度」と回答した者の割合は18.9%であり、これらを合わせると36.7%であった。一方、1年生、2年生及び3年生においては、週1回以上の頻度で学習支援室を利用している者の割合はいずれも15%に達していなかった。

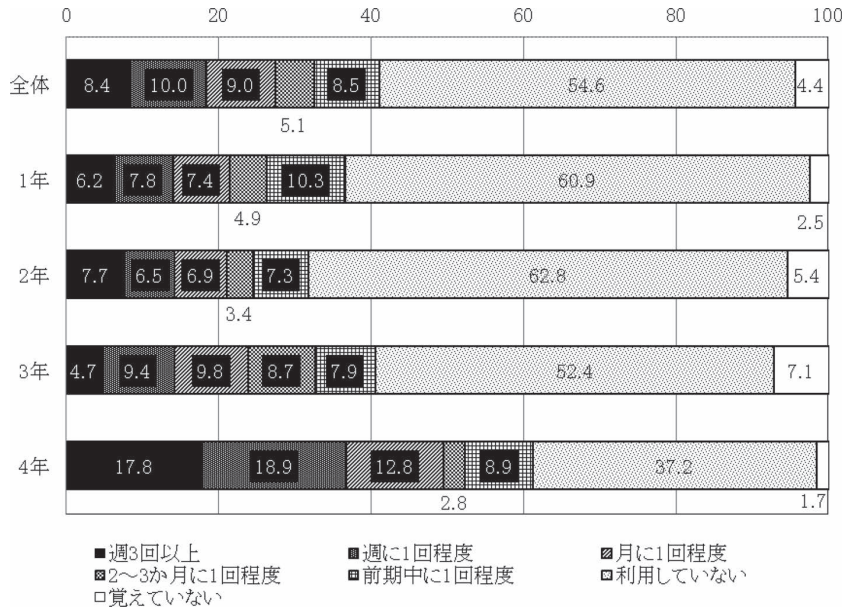


図1 学習支援室・ILS の利用頻度 (n=938)

(2) 学習支援室・ILS の利用目的

図2に利用目的を示す。前期中に1回以上利用した385人について、その利用目的を調査したところ、最も多くの者が選択した項目は「課題 (卒論・レポート等)」であり、その割合は73.0%、2番目が「課題以外の自習のため」で47.3%であった。「特に目的はない」という回答は、単に授業の空き時間を埋めるための居場所を確保するためととれるが、学習支援室・ILSが学修の場である以上、ここにいることは自然と学修の促進につながっていくのではなかろうか。「学習相談のため」の2.1%という数値は一見低いようにも見えるが、専任教員の相談記録によれば、いったん相談に訪れた学生は、継続的に相談や個別学習のため来室する傾向にある。

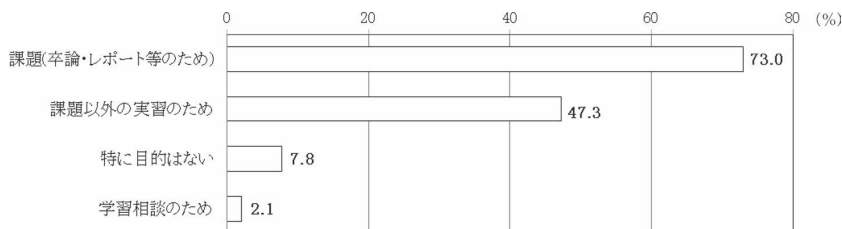


図2 学習支援室・ILSの利用目的 (n=385)

(3) 学習支援室・ILS を利用しない場合の理由

図3に学習支援室を利用しない場合の理由を示す。最も多くの者が選択した項目は「特に利用する必要がないから」であり、その割合は28.8%、2番目が「他の場所(図書館・文教ホール・ゼミ室など)を利用しているから」で24.5%であった。「何をするとところかわからないから」が7.8%、「学習支援室(ILSを含む)の場所がわからないから(わかりづらいから)」が7.1%、「学習支援室(ILS)があることを知らなかったから」が4.4%、合計19.9%にのぼるのは、学習支援室の認知度に問題があることを示している。この点からみて、「特に利用する必要がないから」と回答した学生の中にも、学習支援室についての認識不足から「特に利用する必要がない」と考えている者がかなり含まれている可能性がある。なお、「入りにくい雰囲気だから」が13.5%となっているが、この数字だけで学習支援室の環境の是非を論じることはできない。「入りにくい雰囲気だから」と回答した者のうち38.2%が「他の場所(図書館・文教ホール・ゼミ室など)を利用しているから」と回答している。学習支援室・ILSは南向きの明るい場所に設置され、やや開放的な雰囲気を作り出せるよう設計されていて、ILSは当然私語厳禁であるが、学習支援室はグループ学習をする際の会話はある程度許容している。つまり、より静謐で孤立的な学修環境を好む学生は図書館での学修を選択し、よりリラックスできる学修環境を好む学生は文教ホールやゼミ室を選択するという、学修スタイルによる棲み分けがなされていると考えられるのである。

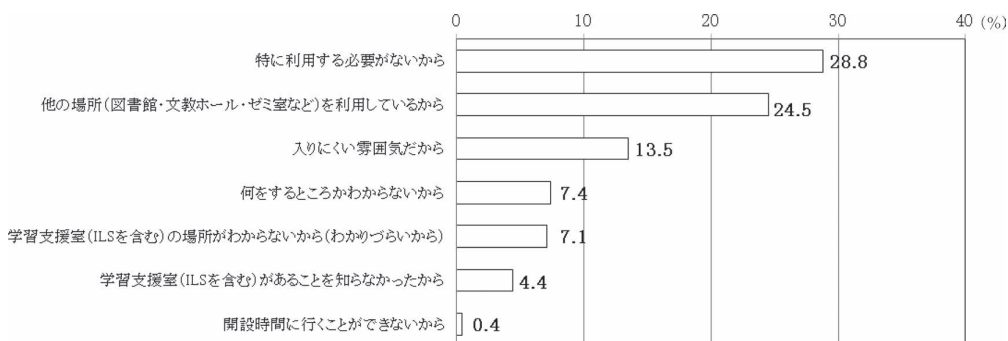


図3 学習支援室・ILS を利用しない場合の理由 (n=938)

(4) 相談窓口の利用の有無

図4に相談窓口の利用の有無を示す。相談窓口を利用した者の割合は全体で1.0%であった。学年別にみると1年生でその割合は最も高く2.1%で、2年生以上に比べれば高いものの、入学したての大学に不慣れな時期であることを考えれば、やはり低い数値といえる。専任教員の記

広島文教女子大学学習支援室の利用状況調査

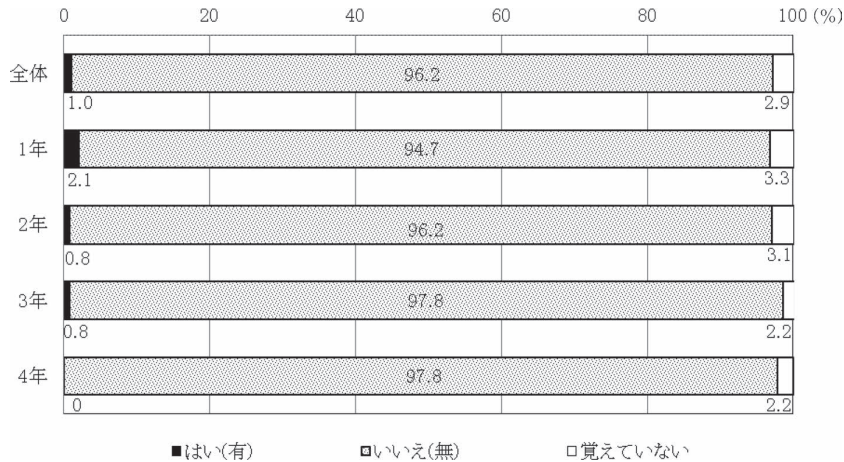


図4 相談窓口の利用の有無 (n=938)

録によれば1年生で、教員に授業のことについて質問したいが気おくれする、という相談があった。このケーでは、専任教員が当該教員にアポイントメントをとったうえで研究室まで同行するといった措置をとった。特に1年生には同様の悩みを抱えているにもかかわらず、消極的な性格のために学習支援室を利用することなく、問題を放置してしまっている学生も多いのではなかろうか。

(5) 相談窓口を利用しない場合の理由

図5に相談窓口を利用しない場合の理由を示す。最も多くの者が選択した項目は「特に利用する必要がないから」であり、その割合は62.6%であった。2番目に多くの者が選択した項目は「何を相談するところかわからないから」で21.7%、3番目は「相談窓口(スタッフ在室)があることを知らなかったから」で20.8%、合計42.5%に達しており、やはり学生相談室についての認知度の低さを示している。「特に利用する必要がないから」と回答したものの中には、(3)の場合と同様、相談窓口でどのような支援を受けることができるのか知らないままに、「特に利用する必要がない」と考えている者が相当数含まれている可能性がある。なお、「相談しにくい雰囲気だから」が7.4%となっているが、(3)で述べたように、学習支援室は学生が気軽に利用できるよう明るく開放的な場として設計されている。しかし消極的な性格の学生にとって、他者の眼に触れやすい環境では、かえって相談しづらくなる場合も多いのではなかろうか。(4)で挙げた事例の学生のように、コミュニケーション能力に不安があるため学習に支障を来して

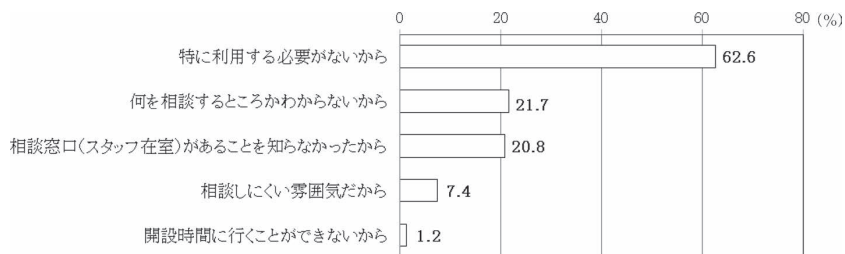


図5 相談窓口を利用しない場合の理由 (n=938)

いるものも少なくないであろう。そういった学生にとっては、開放的な環境はかえってマイナスに働く可能性もあるのである。

ま と め

本調査で明らかになった学習支援室における喫緊の課題は、いかにして学習支援室についての認知度を上げるかということである。「結果」(3)で述べたように、学生間で学修スタイルに応じた学修施設の棲み分けがなされているようであるが、それぞれの学修施設は個々の学生の嗜好性だけでなく学修の内容・目的に応じて使い分けられるべきである。そのためにも、学習支援室・ILSがどのような学修に適しているかを示し、利用する必要がないと考えている学生だけでなく、他の場所を利用している学生に対しても利用の促進を図るべきである。また、相談窓口についての周知を徹底するためには、これまでどのような相談に応じて来たのか、またどのような相談に応じることができるのかを具体的かつ詳細に示す必要がある。これによって、相談窓口を利用する必要はないと考えている学生の中からも、「学習支援」が必要な者を掘り起こせると考える。

相談窓口の利用促進に関しては、支援内容を具体的かつ詳細に広報すると同時に、相談を受け付ける方式を見直す必要もあろう。現在、相談受付は学習支援室のカウンターで直接専任教員に申し出る方式をとっている。しかし「結果(3)」で述べたように、この方式はコミュニケーションの面で不安を抱えている消極的な学生にたいして、逆に相談しづらい環境となっている可能性もある。相談受付の方式については、直接受付以外に学内メールを活用するなど複数の方式がとれるよう検討していきたい。

以上のような改善を推進するためには、学習支援室という一部署だけの活動では限界がある。今後、全学的規模で組織的な支援活動を展開していくためには、各学科、教養教育部及び他の部署などと緊密な協同関係を構築していく必要がある。特に広報的な面においては、学科との協同は重要であり、学習支援室委員を通して学科に対する働きかけを強化し、チューターと緊密に連絡をとりつつ、チューターガイダンスなどによって学習支援室への周知を徹底していきたい。特にチューターは個々の学生との結びつきが強く、担当学生の成績や動向にも詳しく、本学で毎年4月1～3年生を対象に実施しているキャリアアセスメントテストの結果についても詳しく目を通しており、チューターとの連携は必要不可欠である。実際、チューターを通して相談依頼が入り、学習支援を行ったケースもある。なお、各学科、教養教育部との協同体制の整備を進めるにあたっては、それぞれが必要としている「学習支援」「学修支援」についての確に把握したうえで、それぞれのニーズに応じた支援を展開していかなければならない。

今回の調査によって、専任教員の配置やILSの開設といった体制の整備を、全学的な規模での組織的支援につなげていくための課題が明らかになった。学習支援室ではこれに基づいて、学習支援室の今後の活動計画を検討していきたい。

註

- ※1 溝渕・先矢2015 溝渕 淳・先矢慧美「面倒見の良い学習支援とは——これまでの利用状況をふまえて——」『広島文教女子大学高等教育研究』創刊号、広島文教女子大学高等教育研究センター、pp. 65-70

—平成28年1月22日 受理—